

勉強の場として河北潟湖沼研究所への活動参加をおすすめします。私自身が学生ボランティアの活動の中で得たものを紹介します。

研究所に初めて伺ったのは大学四年の最後の年でした。私は大学で絵を学んでおり、何をどのように描くか、という当たり前のことですがとても大事な課題を持っていました。私が活動の中で得たものとは、体験と知識に基づく風景に対する感じ方や考え方です。それが私にとってどれほど大きな変化になったかという、絵を描くときの基盤であるということです。絵を描くとき、写真のような客観的な対象の写しではなく、そこに自分のメッセージが加わってこそ、絵のモチーフや構図、描写の具合が決まります。

活動に参加してから、研究所が目指す環境に共感していく過程が絵からも辿れます。研究所の活動に刺激を受けて生まれた作品を紹介させていただきます。また作品の紹介を通して、研究所の田んぼの様子も少しですがお伝え出来ればと思います。

これは田んぼを描いた一枚目の作品です。奥に小さくあるのはトラクターで、赤や金など目に鮮やかな色で表した土を耕しています。



初めて河北潟の広大な田んぼの風景を見たとき、そこにある人の営みと自然の大きさに圧倒されました。「これ全部米になるのか」と日本の食を支える米どころ石川の規模のでかさがしみじみと感じられました。また、この規模の稲の栄養となる、太陽、水、土の力強さも感じました。特に肥料をまいて耕して土を作る農家さんの仕事を見ていると、エネルギッシュな土が見渡す限りに広がっている様子を描きたいと思いました。風景に対してトラクターは小さく見え、その愛おしさはおもちゃの様な印象を持ち表現しました。

また、河北潟では田んぼに水を入れる前の土づくりの時期にチュウシャクシギを見ました。私は鳥の種類が分かるほどの知識もないし判別も出来ませんが、この研究所には生き物の専門家がそろっています。田んぼには、ときめきと教材がたくさんあり、教えてくれる専門家がいて、いつの間にか夢中になって鳥の観察を始めていたりします。

一枚目から季節が進み夏。植物の勢いが増すころ、田植えを終えても農家の仕事は忙しく、雑草との戦いの時期です。この頃私は、人と自然の共生をテーマに描きたいと思うようになっていました。研究所の農作業に参加していると農家によっ

て農法や大切にしているこだわりがそれぞれ違ってくるのが見えてきます。特に隣が見える田んぼでは分かりやすく、畦の色や虫や雑草の量に顕著です。産業として収穫の質や効率を追及する田んぼや、田んぼに住む生き物を守るため大変な手間を必要とする田んぼ。それぞれが試行錯誤を重ね作られており、農法の奥深さを知りました。「田んぼに住む生き物を守るため大変な手間を必要とする田んぼ」というのはまさに研究所の田ん



ばですが、昔ながらの知恵や道具を取り入れたり
益虫益鳥などを活かしたりと様々な工夫の中で育
てていました。そんな研究所の田んぼから発想を
得て二作目です。

棚田を切り抜きにして形を強調して描いていま
す。棚田は、山の形にそって作られたもので、自
然と人間とで作られた形に面白さを感じ制作しま
した。除草剤や農薬を使わなくても人間の手で除
草することで稲は青々と育ちます。田んぼはたく
さんの生き物の住処でもあり、多様性が求められる
現代において、手間をかけることで自然と共生
してきた昔ながらの田んぼの文化を見直したいと
思い描きました。

三作目は秋の田んぼです。収穫をむかえる金色
の田んぼは目を凝らすとたくさんの生き物がい
て、環境としても産業としても豊かであることを
表現しています。まさに研究所の田んぼがモデル
になっています。しかし空を飛ぶトキには色が無
く描写にリアリティがありません。それは私がま
だ飛んでいるトキを見ることが出来ていないから
です。また、トキにはニッポニア・ニッポンの学
名があるようで、「日本を象徴する鳥」と呼ばれ
ています。しかし日本産のトキは絶滅しました。

トキだけでなく文化を彩る様々な生物が消えよう
としています。豊かな文化が生物多様性によって
支えられていることを美術界からも真剣に考えた
いと思い描きました。また、現在トキは自然保護
の象徴としても存在感を強め、数を増やしていま
す。トキの姿が見えない現在から過去を想う絵で
あり、未来のトキ舞う田んぼの景色を予感させる
絵でもあります。

以上これまでの活動の中で制作した作品です。
活動に参加するようになって小さな生き物たちが
可愛く感じるようになりました。研究所で得た知
識や経験を通して、ものの感じ方や考え方が大き
く変わりました。これからも農をテーマに作品を
作り続けたいし、そのためにもっと環境について
勉強したいと思います。

研究所にとって私はボランティアというほどの
力になれたかどうか分かりません。一方で私に
とって研究所はアーティストとして成長できた場
所です。短い間でしたが発見が多くとても濃い時
間でした。

最後になりますが、私を受け入れて下さった研
究所の皆様、心より感謝いたします。